

国連の現状と日本の国際貢献

石 積 勝

1 講座の総括

今回の講演ではふたつのメインテーマが設定されていた。ひとつは国連の現状について受講者にわかりやすく説明すること。もうひとつは日本の国際貢献とは何かについて話をする事である。結論的に言えば時間的な制約の中で、このふたつの大きなテーマを同時にお話しすることには、やや無理があったのではないと思われる。一通り話をした後に質問を受け、さらに出席者との間での議論を考えていたのだが、二・三の質問を受け、それに答えるだけで時間がきてしまった。話の内容もかなり密度の濃いものになってしまったが、受講者としてはもう少しリラックスしながら、ゆっくりと学ぶことを期待していたかもしれない。

しかし、設定したテーマ自体が相当重いものだったために、どのようにお話ししても軽い話題としてそれを進めることは不可能だったと思う。話し方、テンポはできる限り軽快にとは心がけたが、なにせ内容が内容である。それにも限界がある。

市民大学をいわゆるカルチャーセンターと考えておられた方には、少しきつい内容であったのではないか。大学で通常話をする場合には、おそらく3回分くらいになるであろう内容を、一気に、一回でお話してしまったのではないかと思う。それにもかかわらず、おおかたの受講者は最後まで緊張を保ち、きわめて熱心に聴いておられたようであり、講師としてはおおいに感謝している。

2 講義の内容

前述のように本講義は大きく分けて第一部で国連のこと、第二部で日本の外交的選択、特に憲法改正問題とでの絡みでの日本の選択肢について論じた。つまり今後の日本の方向をどう考えるかという大きな話題になった。それぞれについて当日配

布したレジュメに沿って、自分自身の講義を振り返ってみたい。

第一部 国連と日本

国連についてはあまり時間を割かなかったが、受講者にとってはやはり通常知りえないこともいくつか含まれており、もっと時間をかけて話をして欲しかったのではないかと今にして思う。国連勤務で体験したエピソードなどももっと聞きたかったのではないかと思われる。レジュメに沿って講義を進めたのだが、受講者にとって興味深かったのは、次の点ではなかったかと思う。

第一に国連の予算である。通常予算が実はきわめて少ない額であることは、多くの受講者にとって驚きとして受けとめられたのではないかと思う。また国連の話をする場合に必ず話題になる、日本人国連職員の数なども、やはり興味をもたれる点であるが、今回の受講者にとっても、そのようであった。私の話の最後に出てくる国連改革のテーマも興味を引いたのではなかったと思う。ここでは世間一般に流布している見方とは少し違う、私の独特の見解を述べさせてもらった。

そのひとつは安保理改革、日本の安保理常任理事国入りについてである。私の考えは日本政府あるいは自民党の基本的なスタンスとは若干趣を異にしている。つまり常任理事国入りは軍事面での責任遂行とワンセットになっている、との政府あるいは自民党の考えに対して、私は非軍事的貢献を増強する形でより大きな役割を果たす、すなわち常任理事国にもなる、それが可能であるしそれを追求すべきであると考えているのであるが、この私の主張はどのように受講者に受けとめられたであろうか。

国連については、じつはもうひとつ一般に流布している見方と違う見方を提示した。それは今回のイラク開戦で国連が機能不全に陥った、国連が無力であったといわれている点についてである。世間の大方のそうした解説とは異なり、私は逆に国連が珍しく、大国、特に米国によってコントロールされるのではなく、国連として見解を示し、その見解に最後までこだわったという意味で、むしろ<機能>したのではないかと述べさせていただいた。この見方は、多くの受講者にとっては驚きであったかもしれない。もちろん日本の政治学関係者の中でも少数意見に属するものである。しかし違った方向から考えるという意味で、多少なりともお役に立てらなれば幸いである。さらに付け加えれば、現在ただいま、即ちこの総括を記している2004年5月1日時点でのイラク情勢を踏まえれば、当時の私の見方が実はかなりの的を射たものではなかったかと思われてくる。

今この時点で、イラク統治は急速に国連主導に推移しつつあるが、2003年3月、

米国が開戦に踏み切ったそのとき、国連もまた最終的に米国に追随していたならば、現在以上に国連のイラク統治の正当性に大きな？マークが付いていたであろうし、そうした中での対イラク人との関係はさらに困難になっていたに違いない。アメリカと国連が完全に一体ではなかったことが、今、国連統治のかすかな正当性の根拠となっている。今後の国連を中心とするイラク統治においてプラスの資産として機能する可能性がある。アメリカに対する不信が急速に増大する中で、不承不承であろうともイラク人もまた国連を受け入れ、復興のプロセスを軌道に乗せる以外に選択肢はない様に思われる。その肝心かなめの国連の正当性をかすかに残したのが2003年3月の安保理での決断であったのである。すなわち国連がアメリカを支持しなかったというじつに大きな政治決断だったのである。もとより国連は世界政府ではないことは最近では多くの日本人にも理解されている。したがって従来のような国連を現実以上に理想化しオールマイティな存在として考える日本市民は激減している。しかし一方で国連の限界に失望し、極端な場合には無用論にまで言及する人々も散見される。真実はその中間にあると考えるが、その中での今回の決断はおおいに希望を与えるものであったのではないかと私は思う。

第二部 日本の方向、日本人の生き方

レジュメ6から16に渡る盛りだくさんの内容を一気にお話しするのは確かに無謀であったが、すべてが関連しているものであって、やむをえない側面もある。

公式的には戦後日本外交は<3本柱>といわれるもので進められてきたことをまづもってお話した。つまり国連中心主義、日米同盟重視、アジアの中の日本。こうやってあらためて明示することによって、受講者にとっても、日本のこれから考えなくてはならないことが浮かび上がってきたのではないかと思う。この3本の柱はそれぞれもったものだが、やはりスローガンを超えて、究極の選択に立ち向かわざるを得なくなったとき、相互の矛盾、背反性、そして連動性が明らかに意識されることになる。あらためてこのことを考えるきっかけとして受講者に受けとめられたかどうか。

レジュメ7、8で湾岸戦争、イラク戦争における日本のかかわりについて、その中心的問題を振り返っておいた。それは湾岸戦争あるいはイラク戦争の解説ということではなく、次に出てくる、さらに重要な問題、即ち私たちのこの国の今後の方向を考えるという問題のための布石としてお話した。<イラクの先の日本の選択>を考える前提として、お話させていただいた。

ここらあたりから話は相当ややこしくなる。そういう意味では受講者の中にはもっ

と単刀直入に、講師である私の立場を鮮明に出して話をしてもらったほうがわかり易かった、という意見もあると思われる。初めに、たとえば憲法改正に賛成なのか反対なのかを含め、私の立場を明確に打ち出して欲しかったという受講者が多数いてもおかしくはない。

ただ、私としては市民大学講座は政治集会ではないと思っている。政治集会であるならば私の立場を明快に示し、なぜ私が必要な立場に立つかをできる限り説得的に論ずべきであろう。しかし大学講座である以上、それが市民大学講座であったとしても＜思考の深化＞こそ重要である。結論以上に重要である。私は大学で学生に自分の頭で徹底的に考え抜くことを強いる。知識を受け取るのではなく、自分で考え抜くこと、それを強いる。同様に、今回は、いわば＜日本人の生き方＞というような大問題を、イラク戦争、憲法問題を軸に＜弁証法的＞に考えてみることを強いたわけだが、その意図はどれだけ理解されたか、その点については確信がもてない。最後の最後に私の立場を述べたが、ここで時間的な制約があり、十分それを展開することができなかった。そのこともあって受講者の中には＜結局どうなんだ＞という思いで聞き終えた方がいらっしまったとしても不思議ではない。

最後の10分間を極めて注意深く聞かれた皆さんにはご理解いただけたと思うが、私の基本的なスタンスは改憲論議に対して＜ちょっとまて、憲法改正＞である。しかし私のこのスタンスはいわゆる従来からの護憲派の主張、論議とはやや次元を異にしていると自負している。＜結局どっちの立場なんだ＞という思いで中盤までの私の話を聞かれた皆さんが、最終的に私の真意を汲み取ってくださったか、実は？マークではあるが、とにかく、もし護憲の立場に立つとしたならば、今までの護憲論とは相当違う、大きな歴史観、政治観を背景に持たない限り、説得性がないのではないかというのが私の考えである。護憲・改憲論議はじつは＜21世紀日本はどのような社会として生き抜きたいのか＞という、きわめて根源的な問題なのである。

憲法改正をめぐる右なのか左なのか、それともその間のどこに位置しているのか、というレッテル張りが現在横行しているようだが、私はこの問題は平面的に賛成派VS反対派では考えられないと思っている。まさしくこれこそ＜弁証法的に＞考え抜かなければならない問題であると感じている。平面的にではなく立体的に日本のこれからを考えようと、参加した皆さんにはじつは呼びかけたつもりであるが、どこまでその私の真意が理解されたかは確信をもてない。

この問題どう考えたらもう一步深く向き合うことになるのだろうか、一人一人の参加者が自ら考え出し、宿題を提示されたなど感じていただけたならば、講師と

しては大きな喜びである。そしてまた日本の国際貢献論議においてやはり避けることができない極めて重要な問題であることを、参加者一人一人が再確認して下さったのではないかと思っている。

いずれにしても今回こうした機会を与えてくださった、茅ヶ崎市、市民大学担当者、そして大学側で労をとってくださった照屋教授に感謝申し上げたい。

参照（講演レジュメの一部）

〔国連について〕

1<国連の入り方>

競争試験： 外務省の費用でトレーニーJPO： 年中応募受付

2<顔の見える国際貢献>

国際公務員： 日本人国際公務員：

3<国連とはどんなところか？>

加盟国：[]

場所：ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーン、バンコック、ナイロビETC
東京、名古屋

役割：(イ)政治・安全保障： 安全保障理事会 <PKO>

(ロ)経済援助・開発援助： [] (国際開発計画)その他

(ハ)その他、ありとあらゆる問題：[] (国連難民高等弁務官)、

[] (国連児童基金)、[] (国際司法裁判所)、[] (国連教育科学文化機関)

予算：[]億円（単年度・国連本体通常予算）PKO別、専門機関その他別
（これが約6－7倍）

職員の地理的配分：日本人[]人（望ましい数は256－346）総人数は約2500名

歴史：カント『恒久平和のために』、グロチウス「国際法の父」

ウイルソン「国際連盟」新渡戸稲造

国際連合＝[] (1947) 連合国 (United Nations) VS 枢軸国 (Axis)

4<国連改革の中心>

スリム化・再編成：

安保理改革：常任理事国 ([]) →

イラク戦争で機能しなかった、したがって国連の危機という意見：

〔日本人の生き方〕

5<戦後日本の基本方針>

基本：平和・経済発展（平和・金儲け） VS 富国・強兵

国際関係の基本：外交の三本柱=[]・・・現実には「一国平和主義」の側面

国内的価値観：「人の命は地球よりも重い」平和文化

現実：経済一流・政治三流、存在感の欠如

6<湾岸戦争>

国連と湾岸戦争：多国籍軍にお墨付き、その後の査察、経済制裁で国連機能

日本と湾岸戦争：「一国平和主義」への強い反省。お金（一兆円）だけ出して正式に感謝されず。国際貢献は金だけではない。

「国際貢献」「普通の国」という言葉飛び交う。

「9条があるから」という考え方。

7<イラク戦争>

国連とイラク戦争：お墨付き与えず。復興には条件付で取り組む。

日本とイラク戦争：国連か日米かという選択＝日米を選択。『国益』論浮上
国際政治は甘くない。

自民とイラク戦争：日米関係重い。仏独口と米の橋渡し目指す(復興の局面で)。⇒
軍事を含めた国際貢献⇒9条改憲必要(普通の国さらに日米同盟)

民主とイラク戦争：国連重視。国連の正義の戦争には参加⇒9条改憲必要(普通の国)

公明：9条改憲？ 社民・共産：日米同盟改変・・・9条は変えない

8<国連憲章と9条>

国連憲章：第51条「武力攻撃が発生した場合、安全保障理事会が国際の平和・安全の維持に必要な措置をとるまでの間、固有の個別または集団的自衛の権利を害するものではない」

日本国憲法：第9条第2項「前項の目的を達するため、陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない。国の交戦権は、これを認めない。」

国連憲章が[]だとすれば9条は[]

9<イラクの先の日本の選択>

「普通の国」という選択：9条改憲

9条解釈改憲拡大

「普通じゃない国」という選択：9条保持

10<普通じゃない国の損得勘定>・・・9条がすべてではないが

戦後日本：+戦争しない国、戦争に出かけない国、戦争文化のない国、経済に専念

する国

—国家のプライドもてない国、アメリカの植民地、世界に貢献しない国
現在問われる問題：一国平和主義の限界、日本の国際貢献とは何か、金・人・汗・血

11<日本国憲法の特殊性>

第二次世界大戦の[]気分：日本人だけでなく欧米人にも、[]も。

軍国主義復活の芽を完全に摘む：

パリ不戦条約の先を行く：

近代国家を超える、否定する：近代の政治と国家 政治＝権力＝国家＝物理的強制力

12<第二の敗戦><希望の国>

第二の敗戦：政治的骨抜き状態、自立的判断停止、脳死状態

希望の国：「この国にはすべてがある。希望だけがない」(村上龍『希望の国のエクソダス』)

もし何となく流れで重大決定したら：[]の敗戦。希望もてない。腑抜けの日本。尊敬されない日本。

13<戦後初めて突きつけられている政治的決断>

どのような[]国になるか：

14<選択肢>

① 普通の国に舵を切る

イ) 解釈改憲で何とかやってゆく：[]どんどん意味を失う国、その危険

ロ) 改憲し国連中心でゆく

ハ) 改憲し日米中心でゆく

② 普通じゃない国として[]する

その場合の条件：イ) 国民の[]→政界再編？→外交の[](軍事予算を大幅に減らして援助に。分担金30%持つ。)

ロ) 国際社会の理解と歓迎(その延長線上で[])

15<私の立場>

① []と考える：あわてて改憲はもったいない、冷戦終結のなかで9条の方向にチャンスあるかも。日本の国の形が変わること学生に本気で考えてもらう。

② [](執行猶予)を主張する：60年変えなかった憲法だ。2,3年は国民的大議論を巻き起こすべき。それからでも遅くない。

③ 9条を[]考える舞台づくりを目指す。9条は本当に非現実的かということん議論